いとこ（貳）

岡田美知代

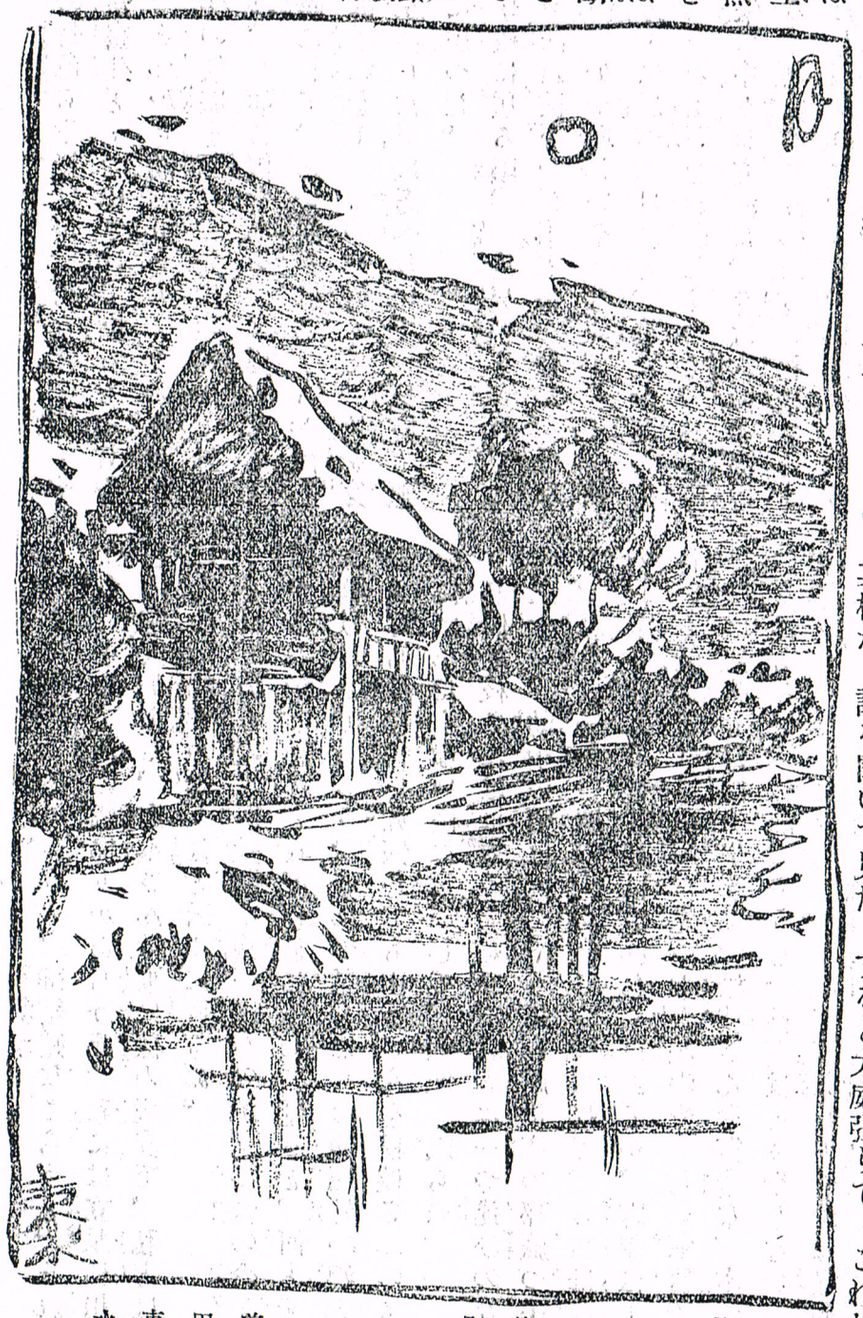
兄様今度の御上京は、わざ〳〵の博覽會見物でも無く、公用を帶びての出張でも無い、兼ねて御持病のお耳の具合ひが、此の頃は兎角いけないので、語學の教師と云ふ現在の兄様御身分には非常の不自由、それはなほざりならぬお醫者の忠告もあつて、其の根本的御療治の爲めにとお出掛けなので。

無事着京、昔馴染の秀成館へ投宿致し候。とのお端書があつたのは、最早彼れ是れ十日も以前、その後何等のお便りも無いので、如何の御容態やらと内々お案じ申て居た矢先きへ、今朝來たお手紙はあつく、父様役所に御出勤までを母様とお二人きり、御書齋で何やらひそひそ御相談の御様子、やがて九時が鳴つて、父様を玄關にお送り申ての後、若しや變つた事でもと母様に伺へば、兄様御病氣も追々快い方で、決して何でもないから心配おしでないよと繰り返へし仰有る調子も輕く、お顔元も變りは無いが、思ひなしか如何やら落着かぬらしう、直ぐまた何處へか、細々の書面をお認めなさる。

如何しても變だ、何か仔細がなくてはならぬとの疑ひは、容易に晴れないけれど、左様かと云つて此の上母様を强ふるの勇氣も無い、で不審は其儘、何時ものやうに父様御書齋へ新聞を取りに行く、とまだ今朝は御覽なさらないものと見えて、帶封のまゝ机の上に置かれた、直ぐ其の横のは兄様からの彼のお手紙で、これさへ讀めば、今朝からの疑問は何も彼もすつかり解るのだと思ふと、もう堪らず讀み度くて、惡いか知らと、それでも多少躊躇しないではなかつたが、何にうちうちの間柄だもの、搆ふ事は無い、それに兄様お身の上に、若しもの事でもあるのだと、私一人知らないで居て、後から甚麼に殘念だか、それは私が知つたからと云つて、徒らに氣をもむばかり、何のたしにも成らぬ、成りはしないけれど妹としては知らん顔で居られるものぢや無い、と云つたやうな理屈をつけて、私は到頭披いて仕舞つた。

如何にも母様の仰有つた通り、兄様御病氣は追々快方に趣き、此分ならば、此處三週間もすれば全治するであらうとの事、思はず安堵の胸を撫でゝ、なほも讀み續けた私は、そゝろに胸の騷ぐを禁じ得なかつた。

實に意外な緣談――と云つて何も不思議は無いが、松枝さんを兄様の親友山本さんのお嫁にと云ふので、山本さんはずつと以前、兄様が御一所に歸つて、一夏を私共の舊宅瀨戸内海の加島にお過しなさつたこともある。まだ其の頃は同志社豫備校の生徒で畫は終日章魚を捕つたり、海を泳いだり、或時は兄様と二人、無斷で百貫島の燈臺をあてに船を出して夜に成つても歸つて來ず、家中大騷ぎをして後で父様に叱られるやら、夜は私共幼い者を對手に、小さな機械で幻燈會だと云つては、演說か何かのお稽古、兄様も山本さんも他所の書生さんと違つて、何時も馬鹿に大きな、眞白な西洋手拭をお腰のところへぶら下げてついぞ袴は穿かず、小供心にも可笑しく思つて、何故其様かと譯を聞いて見た。すると大威張りで、これが



水東田前　麹町　月

我々同志社ボーイの特色ぢや無いが、袴なんぞ穿くやうなそんな那麼墮落書生と一つにされて堪るもんぢや無い。と仰有つて、それから同志社そも〳〵の歴史から、新島校長御一生の履歴を話し、先生の船中で外國人の爲めに侮辱られ、お額に傷をあそばす處になると平常亂暴で腕白な僻にして、熱い涙をぼろ〳〵お溢しなすつた、私は何故手拭を上げるのが好くて、袴を穿いては惡いのか、左樣した事は考へないで、只譯も無く二人を偉いものに思つた。

其の後同志社女學校に居る頃、一度兄樣と連れ立つて、寄宿舍の私をお訪ね被下つた事もあつたが、幼馴染でありながら、何だかお恥しいやうな氣がして、快活なおやさし相な方とは思つたけれど、染々お話しも申上げず、一昨年大學の工科をお出なすつて、其の時のお寫眞で見た風采は中々お立派だ、今は大阪の高等工業にお勤めなさる。其山本さんのお嫁に松枝さん——私は何か知ら、だしぬかれたやうな、欺かれたやうな氣がして、何だ、松枝さんは出戻りぢや無いか、とまあ、つい毒づいても見度くなる。

けれども、山本さんだつて最早彼れ是れ三十近くて被入るんだもの、何時まで獨身でおいでなさる筈は無し、また獨身で被居らうと、御結婚なさらうと、それが私にとつて何の關係があらうぞ、私には立派に相思の戀人がある、山本さんは唯兄樣の親友で、私とはほんの幼馴染の知り合と云ふに過ぎぬ。

それであるのに何故斯う胸が騒ぐのか、不快の念を感ずるのか、われと我が心をたゞして見ると、何と云ふ情けなさであらう、これが見も知らぬ他所外の娘と云ふなら兎に角、如何しても山本さんを松枝さんのものにはしたくない樣な氣がして、如何も成らぬ。

其僻松枝さんは母方の從妹で、私とは一つ違ひの今年二十一、幼少い頃は同じやうにお祖母樣の秘藏つ子で、私共は一年一度の大法會につれられて、お祖母樣のお家で會ふのを甚麼に嬉しく喜んでか、容貌は美しいと云ふでは無いが、先づ十人並のやさしい氣質で母樣は何時も口癖のやうに、松枝さんを御覽な、本當に女性らしい、お前のやうなお轉婆はありやしないと仰有つて、大したお氣に入りだ。實際しとやかな從順な性れで、十九の春、岡山高等女學校を卒業すると直ぐ、玉島のある商家へ嫁つて、夫婦なか睦しく一年ばかり辛抱して居るうち、お實家と姑との折合が惡く、終に其の爲めあきもあかれもしない仲を割いて、無理

に引戻す事に成つた。其の時すら唯た一言の不服も云はないで、涙をのんで親の命に從つたと云ふ、つむじ曲りの我々には何ぼ何でも意氣地無く、餘り感心も出來ないやうに思はれるけれ共、伯母樣はそれを自慢でいらつしやる、で幾ら產れた家とは云へ、一旦出た以上、今更實家へ歸るのも近所の手前面目ないとかで、暫く私の家へ來て居たが、去るの去らぬのと久しくもました末、漸く片が着いて、簞笥長持一切の荷物を送り返へされた時には、流石松枝さんもおさへ切れぬ涙に、胸を抱いて頽折れた。とまた惡い上にも惡い事が重なつて、昨年の夏、辯護士で被居つた伯父樣が卒中で御死亡なので、急に變つた家計の都合上、賴まれるのを幸に、今では小學校に出て居る不幸な身、私とても決して其の爲め惡しかれとは思はず、如何がなして幸福な後半生を送り得るやうにと祈らないではないが……併し不快の念は兎角拂うに由なく、松枝も何時まで獨身で置けるものぢや無し、彼樣した生意氣な、女教師なんぞにしたくはないけれど、仰有つた伯母樣が此の事をお聞きになつたなら、此上も無い良緣と甚麼にお悅びなさるか、また松枝さんにしても、よしや利郎さん——先夫の名——を忘れ兼ねて居るともしろ、親の命なら再緣して身を固めるに何の否やがあらう、すぐにも談はまとまつて、何も彼も圓滿に納るのだ、と强て目出度い方に考へては見るけれど、又しても一種例へやうも無い嫉妬——か、それに似た淺間しい念が胸一杯にこみあげて、寂しい、冷い涙は止め途も無く流れ出る。

[redacted]